

住の地産地建が環境を守り地域を甦らす

4 無機質化する家やまちが健康を奪い精神を蝕む

どうして日本は家づくりもまちづくりも全てが、コンクリートとプラスチック化していくのでしょうか。この無機質化に対して、何の疑問を持たない或いは何も感じないならその精神を疑ってみることです。

都会の公園などを仮の埒にしている人々を指し、僕等はホームレスなどと呼んでいます。英語の home は「家庭」と訳されますが、明治 20 年代に訳語として当てられ、以来今日まで人々の暮らしに馴染んだ言葉です。「いつかはマイホームを。良き子供は良き家庭に育つ。健康は良き家庭から。・・・」

明治時代になると日本は西洋文化を積極的に取り入れてきたわけですが、そのころに訳された外国語は、良くその意味が咀嚼される確な漢字が当てられていると感心することは度々あります。

家庭もその一つ。家は・・・house、庭は・・・garden です。そう、家庭というのは、house and garden。建物のみでは駄目で土や緑がなければ良き暮らしも築けずバランスの取れた人間も育たないことを昔の人はよく知っていたのです。

コンクリート造りの高層マンションの一室から、都市公園のブルーシートに暮らす人々を見下ろしてホームレスが・・・と哀れんでも、そう、そういうあなたもまた、ホームレスです。彼らには庭はあるのです。しかし、あなたには、庭は・・・？

都会ばかりでなく、地方でも最近の家づくりを見ると、家はあってもこの庭が無い暮らしがあちこちに見られます。家庭は、家族・・・family でもありません。一人だって家庭はあるのです。

我々はサイボーグではありません。血の通った生物であり、緑は進化してきた僕等人間の大先輩でもあり祖先ですから、普通の感覚を有している人なら、緑に親しみを感じて当然です。

「裸のサル」を書いたイギリスの動物行動学者「ディズモンド・モリス」が 1980 年代に著した「人間動物園」の中で住環境の無機質化が人間の精神をも蝕むという警告を発しています。自然の状態で棲息してきた野生動物を、コンクリートと鉄格子の動物園の檻で長期飼育をしていると、自然状態では見られない「親や子の虐待、同性愛、凶暴化、精神不安定化などが」見られるようになるという事実を報告しています。

人間は、確かに高等動物ですから多様な住環境に適応できる能力は彼らよりあるとは思いますが、都会はまさに、このコンクリートとプラスチックに囲まれた無機質な巨大空間と化し、すなわち野生生物の動物園に対して、人間が入っている動物園だと言うわけです。モリスの指摘からして、知らず知らずのうちに何らかの影響があっても不思議ではありません。無機質化していくと云うことは、無数の微生物や小動物を死滅させていくことでもあり、結局は生態系のバランスを崩していくことに他ならないし、人間の免疫力も低下させていくのでしょうか。そのことが、予測もしないウイルスや病原菌の蔓延を招くということにも繋がるのではないのでしょうか。

今日、我が国では先進諸国の中でも突出し異常事態とも言える自殺者が毎年 3 万人を超え、様々な理由なき殺傷事件も度々起こっています。その背景には管理社会の進展による疎外化や競争による所得格差の拡大などがあるとは思いますが、もう一つ、子供の頃から育つ空間が花も蝶々もないような環境、すなわち無機質化されてきているというその影響も計り知れないと思うのです。まさに字のごとく良き「家庭」で育つ子供がどれだけいるのでしょうか。

生涯暮らす住空間だけでなく、事業所の建物も、さらにまちづくり全体のあるべき姿を考え直す時です。人間関係もそうですが、もっとウェットでオーガニックなまちづくりが今日ほど求められているときはありません。